鼻腔血管線維腫の2例

桜井 一生・森 茂樹・内藤 健晴
岩見 公晴・高須 昭彦・岩田 重信

Two Cases of Angiofibroma of the Nasal Cavity

Kazuo Sakurai, Shigeki Mori, Kensei Naito, Kosei Iwami
Akihiko Takasu and Shigenobu Iwata
(Fujita-Gakuen University)

Case 1. A 37-year-old male complained of epistaxis and nasal obstruction on the left side. X-ray examination showed a tumor in the left nasal cavity, but the paranasal sinuses were clear. The tumor was removed, and the histopathological diagnosis was angiofibroma.

Case 2. A 37-year-old female complained of epistaxis and nasal obstruction on the left side. The tumor was deep red with an irregular surface. X-ray examination showed clear paranasal sinuses. We removed the tumor under local anesthesia. The histopathological diagnosis was angiofibroma.

I. はじめに

血管線維腫は、鼻咽腔に好発する良性腫瘍として知られており、鼻咽腔以外に発生することは極めて稀である。最近我々は、固有鼻腔に原発した血管線維腫の2症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

II. 症 例

症例 1

患者：[] 37才，男性。
初診：昭和55年10月21日
主訴：左鼻出血
家族歴：特記すべき事項なし
既往歴：慢性肺炎，高血圧
現病歴：昭和55年8月下旬に左鼻出血，鼻閉
塞感に気づき9月初旬に鼻背部の腫脹をきたし

近医受診し，出血性鼻茸と診断され当科紹介された。頭痛，難聴等その他の症状はなかった。

初診時所見：耳・咽喉頭には異常なく，前鼻鏡検査では図1に示すように左鼻腔内には凹凸不整な暗赤色の易出血性腫瘍を認めた。腫瘍は左鼻腔内に充満し，steelの部位は確認できなかった。また，左鼻背部はび慢性に腫脹し外鼻の変形を認めたが，頸部リンパ節は触知しな

図1 鼻腔所見

図2 症例1の Water's 法

図3 症例1のCT像

った。

X線所見：単純X線（Water's 法）では，図2に示すように，両側の上顎洞および篩骨洞に軽度陰影を左鼻腔内には腫瘍陰影を認めた．CT-SCAN では，図3のように鼻腔前端部に充実性腫瘍陰影を認めたが，単純X線にみる如く副鼻腔には異常なく骨欠損もない．

入院時検査成績：体格中等度，栄養良好で入院時一般検査では，表1に示すように異常は認めなかった．

手術所見：入院後，鼻腔内の腫瘍より生検を行ない血管腫の診断を得た．大量出血の可能性もあるため，全身麻酔下に腫瘍摘出術を施行した．腫瘍は鼻腔より絞断器にて一塊にし摘出された．steel は鼻中隔にあり，同部よりの出血を認めたため，正常周囲組織を含め再切除し，電気メスにて止血した．術中出血量は300 ccであった．摘出された腫瘍は，図4に示すように40×25 mm で弾性軟の薄い被膜におおわれた暗赤色の平面凹凸不整な腫瘍であった．

病理組織像：摘出標本の病理組織検査にて，鼻中隔より発生した血管線維腫と診断した．図5に示すように，強い増生を示す線維組織中に一層の内皮細胞からなる血管腔が多数認められる血管細維腫の像であった．

表1 入院時検査所見

	症 例 1	症 例 2
赤血球数	459×10 ⁴ /mm ³	521×10 ⁴ /mm ³
白血球数	8100/mm ³	300/mm ³
血小板数	226×10 ³ /mm ³	258×10 ³ /mm ³
Hb	14.6 g/dl	15.3g/dl
Ht	43.3%	47.6%
出血時間	正常範囲内	正常範囲内
凝固時間	正常範囲内	正常範囲内
血沈 1時間値	8 mm	—
2時間値	31 mm	—
RPR	(-)	(-)
HB	(-)	(-)
胸部X線	異常なし	異常なし
E. C. G.	正常範囲内	正常範囲内

図4 症例1の摘出標本

図5 症例1の病理組織像

図6 鼻腔所見

術後経過：術後3年を経過した現在，再発を認めていない．また，術後測定した尿中 17-K S は7.4 mg/day, 17-OHCS は5.4 mg/day でともに正常範囲内であった．

症例2

患者： 37才，女性

図7 症例2の Water's 法

図8 症例2の断層写真

初診：昭和56年12月14日

主訴：左鼻出血

家族歴：母親が口腔癌

既往歴：特記すべき事項なし

現病歴：昭和56年10月頃より左鼻出血，鼻閉塞感に気づき，近医にて出血性鼻茸と診断され通院加療するも軽快せず，腫瘤の増大傾向を認めたため当科紹介された．

初診時所見：前鼻鏡検査で，図6に示したように左鼻腔に中鼻道より発生した暗赤色で一部白苔の付着した腫瘤を認めたが，上咽頭部には

異常はなかった。耳・咽喉頭は正常で、頸部リンパ節は触知しなかった。

X線写真所見: Water's 法(図7)では、左篩骨洞に軽度陰影を認め、前額断層(図8)では、左鼻腔内に腫瘤陰影を左篩骨洞にも単純X線と同様に陰影を認めるが、両上顎洞には異常なく骨欠損もない。

入院時検査成績: 体格中等度、栄養状態良好で、入院時一般検査では表1に示したように異常は認めなかった。

手術所見: 前鼻鏡検査およびX線所見にて鼻腔内良性腫瘍と診断し、局所麻酔にて腫瘍の摘出を試みた。腫瘍の steel は中鼻道にあり、鼻内より絞断器にて容易に摘出できた。術中出血量は60 cc であった。摘出された腫瘍は、図9に示すように35×35 mm で、暗赤色の薄い被膜におおわれた凹凸不整な腫瘍であった。

病理組織像: 摘出腫瘍の病理組織像を図10に示した。間質部は、一部に赤血球を含んだ不整形の血管腔が多数みられ線維組織の増生も著明で、中鼻道原発の血管線維腫と診断し得た。

術後経過: 術後2年を経過したが、局所再発はない。また、術後測定した尿中 17-KS は8.2

mg/day, 17-OHCS は5.2 mg/day でともに正常範囲内であった。

図9 症例2の摘出標本

図10 症例2の病理組織像

III. 考

血管線維腫は、思春期前後の若年男子の鼻咽腔に好発する腫瘍として知られているが、鼻咽腔以外の部位に発生することは極めて稀である。鼻・副鼻腔に原発した血管線維腫の報告例は、表2に示すように本邦では我々の2症例を含めて10例、欧米では10例の計20例である。

鼻・副鼻腔血管線維腫の性別は、15:5と男性に多いが、鼻咽腔血管線維腫が241:18と圧倒的に男性に多い¹⁾のに比べると女性にやや発症頻度が高いようである。

年令は、6才から58才までで平均年令26.8才であるが、25才以上にも8例40%の発症をみた。これは、鼻咽腔血管線維腫の93.1%が25才以下に発症している¹⁾のに比べると、森田ら²⁾が述べているように鼻・副鼻腔に原発する血管

按

線維腫の発症年令はやや高い傾向を認めた。

自覚症状は、鼻出血、鼻閉塞感が多いが、腫瘍が増大し外鼻の変形²⁾や頬部の腫脹³⁾をきたしたり、蝶形骨洞原発のものでは、視力障害⁴⁾や前頭部痛⁵⁾をきたしたという症例の報告があった。

発生部位は、上顎洞が12例と最多で、次いで鼻腔6例、蝶形骨洞2例であった。鼻腔6例のうち原発部位が明らかなものは5例で、中鼻道3例、鼻中隔2例であった。

術前に血管線維腫と診断し得た症例は、14例中3例であった。術前診断は、血管腫、線維腫、出血性鼻茸等さまざまであったが、骨欠損を伴うものが1例⁶⁾みられ、骨欠損をきたした症例では悪性腫瘍との鑑別は極めて困難である

表2 鼻・副鼻腔血管線維腫の報告例

報告者(年号)	性	年令	主 訴	発生部位
1. 村 山 (1904) ¹⁰⁾	m.	50	鼻 閉	上顎洞
2. Tsuru (1936) ¹¹⁾	f.	33		上顎洞
3. Munson (1941)	m.	15	鼻 出 血	上顎洞
4. Alajmo (1962)	m.	58		上顎洞
5. Alajmo (1961)	m.	6	鼻 閉	上顎洞
6. Horo (1961)	m.	21	頸 部 腫 脹	上顎洞
7. Horo (1962)	m.	13	鼻出血, 鼻閉	上顎洞
8. Reddy (1963)	f.	50	視 力 障 害	蝶形骨洞
9. 小 倉 ら (1965)	m.	16	鼻出血, 眼窩下部腫脹	上顎洞
10. Manigliau (1969)	m.	15	鼻 閉	上顎洞
11. 山 際 ら (1974)	m.	18	鼻閉, 前頭部痛	蝶形骨洞
12. Krntchkoff (1977) ¹⁴⁾	m.	12	口腔内出血	上顎洞
13. 野 垣 ら (1977)	m.	22	鼻 閉	上顎洞
14. 野 垣 ら (1977)	f.	19	鼻出血, 鼻閉	鼻 腔
15. 野 垣 ら (1977)	m.	22	鼻 出 血	上顎洞
16. Kanimuürk (1978) ¹⁷⁾	f.	47		鼻 腔
17. 平 出 ら (1978)	m.	13	鼻出血, 鼻閉	鼻 腔
18. 古 川 ら (1980) ¹⁸⁾	m.	21	鼻 閉	鼻 腔
19. 自 験 例 (1983)	m.	37	鼻 出 血	鼻 腔
20. 自 験 例 (1983)	f.	37	鼻 出 血	鼻 腔

と思われた。本腫瘍は、1) 鼻・副鼻腔に発生することは極めて稀であること、2) 易出血性で生検が容易でないこと、3) 小さい生検標本では、病理組織学的検査が不十分となり確定診断できないことがあること⁷⁾等の理由によって術前確定診断が難しいと思われた。我々の症例では、1例は血管腫、他の1例は鼻腔内良性腫瘍という術前診断をつけていた。

治療は、20例全例に手術の摘出が行なわれている。摘出時に電気焼灼¹⁵⁾と cryosurgery⁸⁾を併用したものがそれぞれ1例ずつあった。また、放射線治療を併用したものが3例⁴⁾¹²⁾¹⁶⁾あった。術中出血量は、1000 cc を越える症例もあり³⁾⁵⁾⁷⁾¹³⁾、手術に際しては出血に対する十分な準備が必要と思われる。我々も症例1に対し

て、腫瘍が大きく、鼻腔よりの摘出が容易でなく、出血により十分な視野が得られないと考え、まず左上顎洞を犬歯下より開洞し、鼻腔側壁を開放できるよう準備をした上で腫瘍の摘出を試みた。転帰の明らかな13例では1例の再発例もなく、鼻咽腔に発生する血管線維腫が、周囲組織への浸潤傾向が強く再発をきたし易い⁹⁾のに対して、比較的予後良好であった。

本腫瘍の発生原因として性ホルモン説が有力⁷⁾¹⁵⁾であるが、自験例では術後測定した尿中17-KS は7.4 mg/dl, 8.2 mg/dl, 17-OHCS は5.4 mg/dl, 5.2 mg/dl とともに正常範囲内であり、この説を支持する結果は得られなかった。

IV. ま と め

37才の男性と37才の女性の固有鼻腔に原発した血管線維の2症例を経験したので、その大要を報告し、鼻、副鼻腔に原発した血管線維腫20例につき文献的考察を行なった。

本論文の要旨は, 第29回日耳鼻東海地方部会連合会にて口演した.

参 考 文 献

- 1) 古市暢夫, 等: 巨大な鼻咽腔血管線維腫の2例と本邦報告例についての文献的考察. 耳喉 **44**: 875-890, 1972.
- 2) 森田守: 鼻・副鼻腔腫瘍. 臨床耳鼻咽喉科学3, 沢木, 設楽, 野村編, p. 265-266, 中学医学社, 1977.
- 3) Hora, J. F., et al.: Extranasopharyngeal juvenile angiofibroma. Ann Otol Rhinol Laryngol **70**: 164-170, 1961.
- 4) Reddy, J. B., et al.: Angiofibroma of the sphenoid sinus. Laryngoscope **73**: 108-119, 1963.
- 5) 山際幹和, 他: 蝶形洞血管線維腫の一症例. 耳鼻臨床 **67**: 1103-1107, 1974.
- 6) 野垣俊幸, 他: 鼻腔および上顎洞原発の若年性血管線維腫. 耳展 **20**: 230-237, 1977.
- 7) 小倉義郎, 他: 上顎洞に原発した若年性血管線維腫の1治験例. 日耳鼻 **68**: 1234-1240, 1965.
- 8) Maniglia, A. J., et al.: Maxillary sinus angiofibroma treated with cryosurgery. Arch Otolaryngol **89**: 111-116, 1969.
- 9) 鈴木慶二, 他: 血管腫. 耳喉 **49**: 731-742, 1977.
- 10) 村山政之助: 上顎洞血管線維腫の一例. 大日耳鼻 **12**: 346-356, 1906.
- 11) Tsuru, Y.: Ueber die Blutgeschwulst in der Nasenhöhle und Nebenhöhlen. Otologia **9**: 316-319, 1936.
Summary on Zbl. Halsnasenohrenheilkunde, **27**: 24-25, 1937.
- 12) Munson, F. T.: Angiofibroma of the left maxillary sinus. Ann Otol Rhinol Laryngol **50**: 561-569, 1941.
- 13) Hora, J. F., et al.: Paranasal juvenile angiofibroma. Arch Otolaryngol **76**: 457-459, 1962.
- 14) Krutchkoff, D. J., et al.: Juvenile nasopharyngeal angiofibroma. An unusual presentation as an oral mass. Arch Otolaryngol **103**: 553-556, 1977.
- 15) 平出文久, 松原宏: 若年性鼻血管線維腫の1例. 耳喉 **50**: 991-997, 1978.
- 16) Alajmo, E., et al.: Il fibroangioma primitivo delle fosse nasali e dei seni paranasali. Boll Mal Orecch **79**: 217-240, 1961.
- 17) E. Kanimutürk, et al.: Report of angiofibroma case with features of interest regarding age, sex and localization. Turk ORL **3**: 27-33, 1978.
- 18) 古川満, 他: 鼻腔に発生した血管線維腫の一症例. 日耳鼻 **83**: 227, 1980.

原稿到着 昭和59年3月12日
 別刷請求先: 桜井一生
 〒470-11 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪
 1番地の98
 名古屋保健衛生大学耳鼻咽喉科学教室